

〈日仏演劇協会会報巻頭言〉

過去を思い、未来を見つめて

伊藤 洋

日仏演劇協会が創設されてからすでに60年近くが過ぎた。周知の通り、本協会の設立はジャン＝ルイ・バローが劇団の公演で来日した折に、鈴木力衛、観世壽夫（以下敬称略）などとの話し合いから始まっている。当時のいきさつ、その後の経緯は、各場で直接関わっておられた渡辺守章・本協会前会長が詳しくいらっしゃる。その歴史をきちんとまとめたものがこれまで本協会には存在していなかったから、いつか正式に会報にでもまとめておくべきであろう。

日仏演劇協会は日仏会館の傘下に入っている一学術団体である。本協会の定款によると、「日本におけるフランス演劇およびフランスにおける日本演劇のより深い、より完全な理解を促進することおよび「フランス人演劇家と日本人演劇家の相互協力を助成する」ことを目的としている。そのために「日本におけるフランス演劇の上演、フランスにおける日本演劇の上演、企画、助成及び関係当局諸団体への達議」などを「積極的に図る」と宣言している。これまでは曲りなりにも諸事業をこうして続けてきて、一時はフランス政府から日仏会館を通して毎年約4万円の補助金を数年間受けていた。今後は日仏会館との関係もより緊密なものにしていく必要があるであろう。

時代の移り変わりがあって、本協会がしなければならぬ事業も今や変わらざるを得なくなっている。定款に書かれている事業内容についても検討する必要がある。「日仏両国の演劇交流への助成」と言っても、すでに我々の手が届かないくらいまで交流は盛んになっており、フランスの劇団の来日公演も、演劇人の来日も数多い。例えば今年（2015年）の秋、10月上旬にはロベール・ルパージュ（カナダ・ケベック出身）の「針とアヘン」が来日公演したし、11月下旬（この原稿執筆

筆時には未公演）にはパリ市立劇場のイヨネスコ「犀」、ピーター・ブルック新作「バトルフィールド」の公演もある。さらにイヨネスコの出身国ルーマニアまで範囲を広げれば、10月中旬にシビウにある国立ラドゥ・スタンカ劇場が来日し、長らくフランスでも活躍していた名演出家シルヴィウ・ブルカレーテの演出作品二本「ガリバー旅行記」と「オイディプス」が上演されている（別稿参照）。

これに加えてフランス人演出家が日本人俳優を使って演出した公演を考えると、9月末から10月にかけての、フレデリック・フィスバック演出のコレネイユ「舞台は夢」（静岡芸術劇場）、10月上旬のクロード・レジ演出、メートルリンク「室内」（神奈川芸術劇場など）もあった。これらは比較的大きな公演であるが、その間にはもっと小さな舞台公演、例えばヴィクトリア・ティエレ＝チャップリンほか作・演出・出演「ミュルミュル・（デ・）ミュール」（世田谷パブリックシアター）もあるし、そのほかフランスのコンテンポラリーダンスやシルク公演などもある。

このように劇団の来日公演、演劇人の来日交流が多いことを考えれば、必ずしも我々のこれまでのような協力、助力はすでに必要なくなっているだろう。しかも世はまさにネット時代で、フランス演劇の最新情報も研究資料もネット上でかなり自由に獲得できる。演劇研究のあり方も変化しているし、演劇資料の収集にしても以前とは大きく変わってきている。その上実際に渡仏しパリや地方の劇場でじかに芝居を観ることも、以前に比べればかなり自由に、安価にできるようになっている。しかもその情報を日本にいる人にメールでその日のうちに通信できる。そんな現代に本協会がすべきことは何なのだろうか。

日仏演劇協会のこれから果たすべき役割をここ

らでもう一度再検討すべきではないだろうか。これが、不肖わたくしが由緒ある本協会の新会長に推されて、就任して最初に思い浮かんだことであつた。本協会の根本的な方向性、事業内容を一度会員間で討議する機会も必要かもしれない。

フランス演劇の上演舞台情報も、今ではネットで調べることで難なく直ちに分かるし、どの芝居が当たり、どれが不評か、新作の評判はどうかなども知れる。新聞や週刊誌の劇評さえも容易にネットで読める。とはいえ、会員全員が始終そんな情報を見ているわけではあるまい。それらの現在の情報がある一定時期に一般会員にネットで流すことも可能だし有意義だろう。やはりネットでの連絡を密にし、有効に活用すべきだろう。

会報で言うならば、これまで掲載していた日本国内のフランス演劇研究に関する情報、特に各大学などの紀要に掲載されたものは得てして見逃されがちであるから、これらの情報は相変わらず必

要不可欠だろう。さらに充実したものを望みたい。会員からの要望も聞く必要があるだろう。

最近、たまたま10数年前から活発に活動していた「フランス演劇クレアシオン」(代表：岡田正子)からその事業をどなたかに引き継いでもらえないか、との申し越しがあつた。実際にフランス演劇を翻訳・上演して、フランス演劇の普及を推進するその会の事業を、本協会の一部門として行うことは本協会の趣旨にも適合しそうであるがいかがだろうか。

今年度をこうした様々な見直しをする一年とすることもよいのではなかろうか。いずれにせよ、言うまでもなく会員諸氏のご協力がなければできないことではない。会員の皆さんにはより一層の積極的なご参加、ご協力、ご助言を心からお願いしたいと思う。

(新会長、早稲田大学名誉教授)